

☆復活節第3主日(4月26日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (使徒たちの宣教 2章 14, 22~33 節)

五旬際の日、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話し始めた。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります。わたしの言葉に耳を傾けてください。イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。

ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。あなたがた自身が既知しているとおりです。このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。

しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。ダビデは、イエスについてこう言っています。

『わたしは、いつも目の前に主を見ていた。主がわたしの右におられるので、わたしは決して動揺しない。だから、わたしの心は楽しみ、舌は喜びたたえる。体も希望のうちに生きるであろう。あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず、あなたの聖なる者を朽ち果てるままにしておかれない。あなたは、命に至る道をわたしに示し、御前にいるわたしを喜びで満たしてくださる。』

兄弟たち、先祖ダビデについては、彼は死んで葬られ、その墓は今でもわたしたちのところにあると、はっきり言えます。ダビデは預言者だったので、彼から生まれる子孫の一人をその王座に着かせると、神がはっきり誓ってくださったことを知っていました。そして、キリストの復活について前もって知り、『彼は陰府に捨てておかれず、その体は朽ち果てることがない』と語りました。神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。それで、イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。あなたがたは、今このことを見聞きしているのです。」

第二朗読（ペトロの手紙Ⅰ 1章17～21節）

愛する皆さん、あなたがたは、人それぞれの行いに応じて公平に裁かれる方を「父」と呼びかけているのですから、この地上に仮住まいする間、その方を畏れて生活すべきです。知ってのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはならず、きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。

キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時代に、あなたがたのために現れてくださいました。あなたがたは、キリストを死者の中から復活させて栄光をお与えになった神を、キリストによって信じています。従って、あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです。

福音朗読（ルカによる福音書 24章13～35節）

ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけのご存じなかったのですか。」イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つげずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。仲間の者が何人か墓へ行って見たのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は

見当たりませんでした。」そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。

一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

初夏に向かう春の日々ですね。新緑の銀杏の木が風に揺れています。園庭では虫探しに忙しい子どもたちが、「ダンゴ虫見つけたー！」と知らせに来ました。最近は虫の数も少なくなりました。モンシロチョウやミツバチもあまり見かけません。自然は多様性の世界で成り立っています。神さまが創造された虫たちもそれぞれに役割があり、それを人間の好みによって淘汰することは、その自然の調和を乱すのではないのでしょうか。ダンゴムシにも立派な役割があるのです。この私にも、そしてあなたにも。今日の福音ではあの有名な「エマオの弟子二人」の話が読まれます。大変美しい印象的な話です。これは二千年前の話ではなく、今の私たちの話です。イエスはこの私に何を語り掛けられるのでしょうか。

第一朗読（使徒たちの宣教 2章 14、22～33節）

使徒ペトロの力強い説教が響き渡ります。「声を張り上げて・・・」とあります。イエスが復活する前のあの「どっちつかずの」姿はもうどこにも見当たりません。今日本では統一地方選挙が行われています。皆声を張り上げて自分の主張を訴えています。その人たちは本当に自分のしようとしていることに自信があるのでしょうか。それは本当に疑問です。でもあのペトロはそうではなく、本当に自信をもってイエスは復活し、今も生きておられ、私たちが罪と死のくびきから解放されたのだと力強く述べているのです。そして私たちはその生きた証人なのだ。

第二朗読（ペトロの手紙Ⅰ 1章 17～21節）

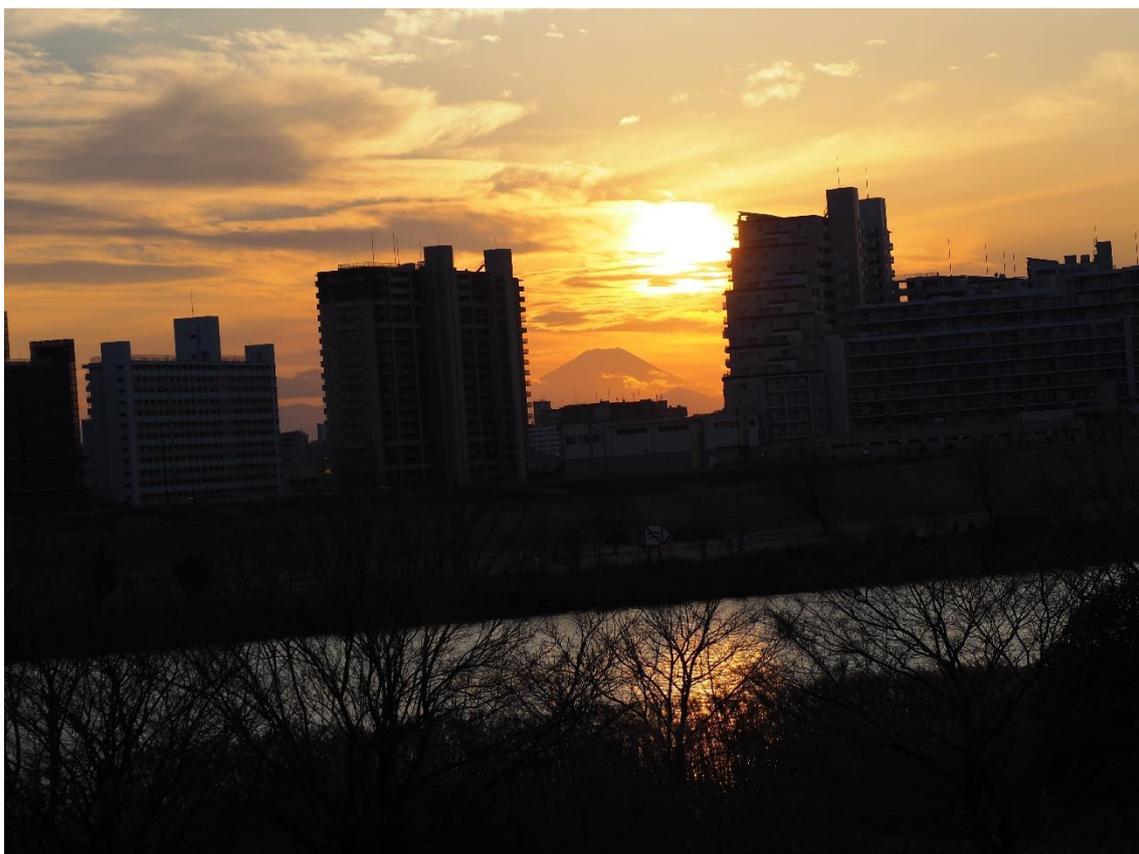
この手紙の中では新たに洗礼を受けてキリスト者となった人たちに対して、その信仰に堅く結ばれて生活するように勧められています。キリストの尊い血による贖いによって私たちは救われたからです。キリストを救い主として遣わされた父なる神は私たちの救い、すなわち主なる神のみ心の内に生きるように私たちに希望を与えてくださっているのです。私たちはその希望によって生きているのです。

福音朗読（ルカによる福音書 24章 13～35節）

ルカによるこの福音はその情景を私たちが思い描けるような素敵な描写で二人の弟子たちとイエスの出会いを描いている大変すばらしい個所です。イエスの十字架上での死後、落胆し傷心のうちに都エルザレムを離れてどこ行く当てもなくとぼとぼと歩いていく弟子二人。彼らには近づいてきたイエスの姿を認める力も残っていなかったのです。イエスはその二人に「冗談ぼく」、「何の話をしていましたか？」と聞かれます。この冗談ぼい問いかけに私はイエスの受難と十字架の死における緊張感、悲壮感から解放された穏やかさ、開放感があるように見えます。また、救い主の死と復活の意味を理解するのに苦しむ弟子たちへのいたわりの優しさが感じられます。

「ああ物分かりが悪く・・・」というイエスの小言は、イエスが自分の役割を改めて弟子たちに解き明かすきっかけとなっていきます。

またイエスだとわかった次第の描写では、「パンを裂かれた時」でした。現代の今ではこの「パンを裂く」ことはミサの中で行われています。ミサの中でパンを裂くときそこに主イエスがおられるのです。現代においてもイエスはさまざまな形で私たちに近づかれ、励ましを与えて、人生の旅の同伴をされておられるのです。いつ私たちはそれに気づくのでしょうか。



「もう日も傾いています。一緒にお泊りください」(ルカ 24.29)

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光

